

小さな“役目”を持って 強く、しなやかに、そして明るい地域づくりへ

徳島県老人クラブ連合会会長 三宅武夫さん

「人はひとりでは生きられんです。だから私は、散歩の時お隣さんと声をかけ合つのです。こんなにちはと」

美馬市老人クラブ連合会会長を務めて11年目、徳島県老人クラブ連合会の会長は3年目の三宅さん。地域のさまざまな現場に身を置き続けてきたその言葉には、常に周囲の人への深い情愛を感じさせる。

高校でのJRC（青少年赤十字）活動、教員としての地域教育、歴史文化の継承への興味、ご家族の介護、三宅さんの人生観は、その一つ一つが点であり、線となり、面となつて今がある。

■少年・青年時代

——「生きる基盤」を知る経験

満州の奉天で生まれ、生後間もなく帰国した。

穴吹中学校ではバレーボール、脇町高校では剣道とJRC（青少年赤十字）の活動に取り組んだ。

「中学校のバレーボール大会でちょっと擦りむいたんですよ。そのときに、JRCの人が飛んできて、赤チンをつけてくれました。それを思い出して、高校ではJRCに入ったんです」

「JRCでは、知的障害のある子どもたちの通う脇町学園へ部員と一緒に訪問していました。『支援』というものではないんですよ。ただ一緒に遊んどっただけです。若いお兄ちゃんが来る、とみんながものすごく喜んでくれるんで、個人的に

土曜日ごとに通っていました」

この当時から、多様な人々と交わる喜びを感じ、自分自身の楽しみと重ね合わせていた三宅さん。80歳を超えてなお、社会とつながり続ける原点は、この頃から深く根を張っていた。

■教師としての探究心は路傍の石仏から

——地元文化と歴史に目をひらく

大学を卒業後、最初の赴任地は山間部の学校だった。

「廃校になったけれど、半田の日浦小学校というところだね。行つてすぐの始業式で司会を任されたり、大変でしたよ」

様々な赴任地を経るなかで、社会科を専攻していた三宅さんは地域の歴史へ目を向けることとなる。きっかけは、なんの変哲もない路傍の石仏だった。



「6年生を担当することが多い、そうすると必ず日本の歴史を教えます。そのなかで『地元

の歴史も教えない』という意識を持つようになりました。そんなとき、勤務校の測名小学校の近くの小道を歩いていて、石仏を見つけた。ほかにも、いろんな石造物がある。ただの石か、とそのときは思っただんですが、形が気になってね。これは何だろう、と……」

その小さな好奇心が、三宅さんを動かした。

「眉山のロープウェイのところの小さい博物館があつたんですよ。その学芸員の方が、仏教美術の専門家で、いろいろ





教えてくださったんです」

それは、のちに京都での研究を後押ししてくれる田中さんとの出会いだった。

「地域の歴史を学ぶ機会が少ないことを、常々問題だと感じていました。田舎に手がかりはそんなにないし、古文書やお寺の仏像を子どもは触れられない。でも、路傍の石は勝手に触っても叱られないでしょ。あとは地名から地域の由来、歴史へと目を向けることもできますよね」確かに、「美馬」という地名ひとつでも「なぜ、どこからこの名前がついたのか」と考えるだけで、歴史に一步踏み込むことになる。古くから馬の産地だったといわれ、平家物語「宇治川の先陣」で描かれた名馬・池月がこの地で生まれ育つたと伝えられていると知るだけで、地域の歴史が見えてくるから不思議だ。

子どもたちに地域の歴史や文化に興味・関心を持ってほしいという一心で、三宅さんは『石と地名』に夢中になっていった。「石を素材とする造形物を『石造美術』

というんです。当時はそんなこと知りませんでした。が、気になる石の写真を持って何度も博物館に通っているうちに、芸員の田中さんに『徳島でこんな研究する人はあまりおらん。これから大切な学問だからひとつ勉強してみてはどうか』と言われたんです」

その後押しを機に、教員の研修制度を利用して半年間、京都教育大学を拠点に学ぶ。史迹美術研究会の方たちとフィールドワークを共にし、研究に没頭。35歳のときだった。

この経験はのちに、地元の古文書を読み解く古文書勉強会の主宰へとつながった。



■恩返しとしての老人クラブ

——定年と家族の介護を経て

定年退職した三宅さんはすぐに老人クラブへ入会した。

「校長時代も含めて、学校活動では地域の老人クラブの方たちに大変お世話になりました。そのご恩返しにの気持ちでした」どんな場面でも気後れせず、人の輪に入っていく積極的な三宅さんだが、当初

はあまり活動に参加できなかった。

「実は、そのころ母と妻が同時に大変な病気になっていました。定年の少し前から、看病と介護の毎日だったんです」

ふたりの闘病生活に寄り添った10年間。ひとりで支え続けた。

「家事なんかはたいしたことないんですよ。でも看病は大変。家族が痛い、しんどいって言うときね、その気持ちを支えるのが、ほんとに辛かったですよ」

食が細くなった妻のために毎朝季節の果物を食べやすいように切った。これなら食べられるかな、と考えながら食材を選んだ。そうして家族の介護のために作っていた料理は、いまは自分のための日々の楽しみのひとつになっている。

「分からねんだら、クックパッドで検索。クックパッドはなぜおいしいか、それは調味料がしっかり入ってるから」と笑った。家族を見送ったあと、自分ひとりの時間がぐんと増え、ここから三宅さんの地域への恩返しに本格的に始まった。

■アイデアで支える地域づくり

——次の世代へ活動をつなぐ

老人クラブには3つの活動がある。地域単位のクラブ、市老連、そして県老連だ。美馬市の市老連会長を11年、県老連会長を3年担い、最も心に残っているのが、コロナ禍での活動だという。

「集まってみんなで楽しいことをするのが老人クラブの根幹。それを奪われた数年間だった。体育大会や芸能発表会など、全部なくなった」

だが、じつと耐える三宅さんではない。「最初に『ラジオ体操のCD』を会員向けに作り、家庭でエクササイズできるよ

うに、壁に貼れる大きなパンフレットも配りました」

少し落ち着いたころ、集まれる場をつくらうと、会話が必要のない映画会を提案した。密にならないよう、席をひとつずつ空けて座席指定し、なにかあったら、その周りの人にすぐ連絡できるように工夫した。

「最初はみんな大反対でしたよ。一年たつてようやくミライズのホールで実現。それから今も映画会は毎年続いているんですよ」

普段からアイディアは次々に湧いてくるといふ三宅さん。思いを形にする方法を話しはじめると、目がイキイキと輝く。

「以前にスマホ教室を計画したんです。中学校の先生と連携して、子たちにアシスタントしてもらって、私たち高齢者が教えてもらう、というもの。コロナで立ち消えになってしまったけど」

「あとはね、どんぐり銀行っていうのを作って、幼稚園や保育園の子どもたちの学びと交流の場にしたり。小中学校の教室に花を届ける活動したら楽しいかな、とか」

ここにひとつ苦悩がある。それは次世代育成への思いだ。

「やってみたいことはいろいろあるけど、私が続けてもいいのか？と最近はずうに考えている。もう80だし、これから後継者を育てていかないといけないからね」

■日常の「こんにちは」を届ける

——点が線になり、面になる地域づくり

「地域の活動というのは多層、多面的なものだから、老人クラブとは別で、小学校での読み聞かせの活動を、二十人ほどのボランティアさんと一緒に続けています。私は昭和の時代を主にして絵本や物

語を読み聞かせて、あとは地元の昔の話を5分くらい。それが私の『役目』かなと思ったことをしています」

「今の私は地域の人が和やかに暮らせるようにするのが『役目』です」

美馬市で廃校になった学校の校歌を集めたDVD作成は、まさに『役目』として取り組んだ活動だ。校歌を探し集め、思い出の写真をつないだ。完成した作品は、忘れられた歌を思い出させ、人と人の記憶を結び合わせた市老連の宝物であり、地域の歴史継承の一助にもなった。

「年を重ねるとだんだん近くに友だちがいなくなる。日常的に『こんにちは』って言える人が少なくなる。だから私は、毎日誰かに『こんにちは』と言うて歩く役目をしてるんです」

「こんにちは」を増やすのは簡単だ。毎日近所をちよつと散歩すればいいのだ。

「同じコースで散歩して、会った人と話す。少なくとも2、3分。それだけでいい。わざわざ『あなたのことを心配だよ』って言いに行くんじゃないかって、ちよつと用事をつくって寄ってみる。それが大事なんですよ」

「ひとりですることができることはしてる。たくさんの方が関わってくれてはじめてできる。点だったらいかん。少なくとも線にならないといかん。そこから面になっていけたら一番いい」

■三宅さんの描く未来

——それぞれが心に小さな『役目』を持つ

三宅さんが伝えているのは、地域に暮らす一人として、心の中にほんの小さな『役目』を置いてみませんか、という穏や

かな提案である。散歩の途中で近所の人に声をかける、立ち話を数分だけ交わす、得意なことをやってみる——そんな役目が未来の自分の孤立を防ぐ大切な一歩になると教えてくれた。

「老人クラブは60歳から100歳まで入れるから、今の活動のプラスαに老人クラブを入れてほしい。必ずいつか、居場所になる」

日常の中に小さな役目を置くこと。その積み重ねは地域を静かに支え、人と人のつながりを育て、そしていつか自分にかえってくる。三宅さんが描く温かい風景である。

「私のとりえは、80だけど頑張って自立してるってことくらいかな。ダメなところは、iPadで面白い動画があったら、ずーっと見て、夜更かししてしまうところ(笑)」

いつもワクワクしていること、いろんなことに好奇心を持ち続けること。それも三宅流の明るい地域づくりにつながっている。(取材・文／宮本幸子)

